

られるのかどうか、北海道の見解があればお願いをしたいというふうに思います。メカニズムが分かっていないとのことで難しい面もあると思いますが、今わかる範囲で教えていただきたいと思いますと思っております。

古村水産局長

ご質問ありがとうございます。今回、太平洋沿岸で発生した赤潮について、全道海域に広がる可能性があるのかということですが、今回確認されたカレニア・セリフォルミスという植物プランクトンが原因で発生した赤潮というのは、国内で初めてということもございまして、現段階では不明な点が非常に多く、その可能性について、現段階で明確な答えはないのですが、これまでの海流の状況なども今後分析をしながら、どのような原因があるのか、なぜ発生したのかも含めて、今後調査を進めていくこととなります。

道といたしましては、赤潮が全道海域に広がる可能性も考え、モニタリング体制につきましては、全道で定点を設けて監視していくことになってまいりますので、そのような情報を、仮に地元で予兆が現れたような場合につきましては、速やかに現地に情報提供をしながら、取り組みを進めていきたいと考えております。今の段階ではこのような回答となります。

堀委員

わかりました。ありがとうございます。

生田技監

続きまして、小西委員ご発言をどうぞ。

小西委員

赤潮の被害の全容がまだ掴めていないということと、原因がわからないということなので、なかなか答えにくい問題なのかもしれませんが、回復のために、ウニの場合は4、5年程度必要だというお話もありましたが、回復に向けてのロードマップのようなものは、どのように考えていらっしゃるのかということをお伺いしたいです。

ウニに関しましては、太平洋沿岸のウニが獲れていないため、今年の夏の日本海側のウニもかなり高騰するのではないかという市場の見方などもございます。そこも含め、お答えいただける範囲でお願いいたします。

古村水産局長

ありがとうございます。被害の大きかったウニに関してのご質問ですが、先ほど説明をいたしました。種苗放流をしてから漁獲量に結びつくまで4、5年程度かかるということで、被害状況が地区によって非常に様々であり、大きな被害を受けたところ、生き残っているウニがそれなりにいる地区とそれぞれ違いますが、基本的には、種苗放流をして漁獲につなげていくということと併せて、生き残ったウニをどのように利用していくかということも含め、国の補正予算で措置されました環境・生態系保全緊急対策事業の中で放流した種苗の追跡調査を含め、今後、それぞれの浜で取り組みを進め、一刻も早い生産回復に繋げていく取り組みを、これからまさに始めるという段階で、そこに道としても支援をしていきたいと考えております。市町村や関係機関と連携をして、

支援をしながら取り組みたいと考えております。

生田技監

その他、どなたかご意見ご質問ございませんか。では続きまして、加藤委員どうぞご発言をお願いいたします。

加藤委員

私は緊急及び中長期的対策の両方にかかることなのですが、経営支援という点でご質問をしたいと思えます。この赤潮とコロナを一緒にしてはいけないのですが、コロナになってしまったときに、先が見えないということで、大変すばらしい飲食店が閉業してしまったり、担い手として考えていた次の方が諦めてしまって、飲食店がなくなってしまったという事例を北海道の各地で見ている、とても残念だなど思っていました。非常に属人的なことですが、私も日高や釧路で、今回のことがショックでお父さん世代が息子に戻って来いと言っていたのをやめたいという声が聞こえてきていますので、そのような担い手を諦めないで、地域全体で支えるというような取り組みについて、すでに何かされているのか又は調査されているのか、どういうお考えなのかお聞きできればと思います。以上です。

古村水産局長

ありがとうございます。加藤委員が仰るように、今後、事業を続けていく方がいなくなるということになりますと、地域にとっても非常に大きな問題でありますし、関係する自治体からも、同様の意見が多く寄せられております。

経営支援につきましては、既存の制度資金や、国のセーフティーネット資金の中で、当面は支援していくことになろうかと思えますが、それ以外にも、こういった資金のあり方があるのかも含めまして、引き続き、地元の姿勢も含めまして関係者の意見を聞きながら、対策の検討を進めていきたいと考えております。

また、加工関係の方からも、様々な意見があり、道の経済部とも連携しながら、そのような資金対応も含めまして、支援のあり方について、引き続き検討させていただきたいと考えております。答えになっていないかもしれませんが、以上でございます。

生田技監

続きまして、木村副会長ご発言をお願いいたします。

木村副会長

昨年ですが、北大の練習船が厚岸沖のラインを調査しておりました。9月20日くらいに赤潮被害があるということで、急遽、植物プランクトンの採取を行わせていただきまして、プレスリリースさせていただいて見られた方もいると思うのですが、沿岸の鉛直構造を初めて出させていただいたということで、これとJAXAのスペース写真を合わせると非常に分布がよくわかってきたということで、1枚だけJAXAの写真を共有させていただきます。

これが9月16日の植物プランクトンです。今回、赤潮の原因となった植物プランクトンの分布ですが、9月16日は北海道の沿岸域から外れていたのです

が、10月になると、道東からえりもにかけて、ほぼ覆うような形になっている。このような分布がわかるようになってきているということと、割と浅いところに濃い分布域があるということで、深いところの水産資源には影響しないが、表層のところはかなり影響するという。このような特性がわかっていて、植物プランクトンのサンプリング等させていただきましたので、今後、道総研等でやられていくということにはなっておりますが、北大としてもできる限り、解明には力を注いでいきたいと思っておりますし、やはりこのようなことは産官学一体となってやっていかなければならない。北海道にとって非常に重要なことですので、今後、北大としても協力させていただきたいと思っております。

冒頭の私の説明でもお話しさせていただいたのですが、環境変動と水産資源の問題は、やはり持続性を考える意味で早急に取り組んでいかなければならないし、これは研究機関や北海道だけでなく、漁業者と非常に強い連携をもっていかなければならない。水産資源から流通までと考えると、北海道にとって非常に重要な問題だと思っております。

一度死滅した資源が戻るのは非常に大変なことです。北大としても微力ではございますが協力させていただきたいと思っております。以上でございます。

古村水産局長

木村副会長、大変ありがとうございます。先ほど画像も見せていただきましたが、我々も道総研も、その情報につきましては共有させていただいておりますし、今後、道総研、国の水研機構それから道が共同で原因究明や予察手法の開発に、まさに先週から本格的に会議を開催いたしまして取り組んでおります。北大からも有識者といたしまして、今井教授以下数名にご参加いただきながら研究を進めていくこととしておりますので、引き続きよろしく願いいたします。

木村副会長

どうもありがとうございます。北大としても、例年道東沿岸、噴火湾の調査はずっと続けてきましたけれども、引き続きプランクトンの問題も調査していきたいと思っておりますし、情報は共有させていただきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

生田技監

どうもありがとうございました。その他何かご意見ご質問等ございませんでしょうか。川崎会長の方から何かご意見ご質問等ございませんか。

川崎会長

色々皆様のご意見を聞かせていただきまして、大変参考になりました。北大の実習船が厚岸へ来ていたときに、たまたま衛星写真を見せていただき、その写真を大臣のところへ、知事と一緒にお願いに行った時に持ってきました。その写真が本当にびっくりするくらい実態と当てはまった。あのような写真をもっと早く出していただければ、来るプランクトンは止められませんかけれども、我々の養殖のカゴを少し深いところへ沈めるとか、そういうことができた

のかなという反省材料になっています。

1つ道にお願いをしたいのですが、今回は赤潮が北海道の道東沿岸だけでしたが、これがオホーツク、日本海にも出現するようなことがあれば、すべての養殖漁業に私は影響があると思うのです。大樹のサクラマスの養殖は全滅いたしましたし、私どももヒラメやマツカワの養殖試験をやっておりましたけれども、ほとんど死にました。そうすると、今まで北海道が進めようとしてきた増養殖漁業が根幹から崩れるわけです。やはり陸上養殖というものにシフトをしていかなければ、今後北海道が海産物を消費者の皆さんに提供していくには、安定しないだろうなと思っています。そういう意味では、陸上養殖も北海道でもどんどん取り入れられるように、なおかつ、大手の水産業者だけではなく、今漁業を営んでいる小さな漁師の皆さんがやれるような方法を考えなければならぬと思っています。ですから、その指導を北海道にしっかりと、我々漁業者にやっていただければと思っています。

それからもう一つ、今回は皆さんのお力添えのおかげで、国から15億、道と市町村5、6億程度で21億という予算がついたのですが、特にウニですけれども、去年の9月以降、赤潮が発生してからに限り国が買い取るということなんですね。ご存知のとおりウニは漁獲するまで3、4年もかかります。1年間を通じて稚ウニを放流しています。この9月以前に撒いたものについては、今回の国の予算に入らないという非常に不可思議な方向性を出しており、例えば5月に撒いたものも、3月に撒いたものも、或いは10月11月に撒こうとしていたものも同じような救済処置を取るべきだと私は思っています。国の説明会があり、うちの職員も出席したのですが、なかなかそういう方向には向いていただけません。北海道からも、やはり3年も4年もかかるものですから、この月だけ放流すればいいというものではないということ、一つご理解をいただけるように説明願えればと思っています。以上です。

古村水産局長

会長ありがとうございます。まず陸上養殖に関してですが、道としても栽培漁業をより一層推進するという考え方で、これからも取り組んでいかなければならないと考えております。そういった中で、今回赤潮による大きな被害もありましたので、今後のことを考えると、会長の言うように陸上での養殖についても、検討を進めていかなければならない課題だと感じておりますので、どういったやり方がいいのかも含めまして、引き続き内部でも検討を進めて、地域の意見も聞きながら、取り組みを進めていければと考えておりますのでよろしくお願いたします。

2点目の国の事業の関係であります。1月7日に国の方から説明があつて以降、各地域を回って、どういう取り組みが対象となるのか、どういう取り組みを進めるのかということ、現地の方と協議させていただいておりますので、国に対し柔軟な運用につきましても協議して参りたいと思っておりますし、何よりこの20億を有効に活用できるよう、引き続き地元のお話も聞きながら取り組みを進めていきたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。

生田技監

他にどなたかご意見ご質問等ございませんでしょうか。いろいろご意見、ご質問いただきましたけれども、本議題につきましては、ここまでとさせていただいて次の議題に移らせていただいでよろしいでしょうか。

それでは次に議題（４）第５期北海道水産業・漁村振興推進計画の策定について、担当の方から説明をさせていただきます。

千代谷課長補佐
（水産企画係）

（「第５期北海道水産業・漁村振興推進計画の策定について」資料３－１～５に基づき説明。）

生田技監

第５期の新たな計画の策定について説明をさせていただきました。今後１年間の時間をかけて、審議会でもご議論いただきながら、策定を進めて参りたいと考えてございます。検討にあたって必要と考えられる視点等についてのご意見、またはご質問等ございましたら、よろしくお願ひいたします。それでは藤原委員、よろしくお願ひいたします。

藤原委員

資料の３－４で確認したいのですが、遊漁船の問題で、この間広島の方からお電話をいただきまして、広島で高級魚が遊漁者によって大量に獲られており、乱獲のような状態で、漁業者がやる気を無くしているという話がありました。北海道はどうかと聞かれたので、北海道も秋サケ等で乱獲されていますよと話したのですが、具体的に道と国で、遊漁船に対する問題にどのように取り組んでいるか教えていただきたいと思ひます。

古村水産局長

ありがとうございます。遊漁対策についてということですが、北海道でも、おっしゃる通り、秋サケ釣りに関しては地域的にかなり大きな問題になっている地区もございます。最近ではクロマグロの遊漁の関係で、ＴＡＣ魚種でありますことから、従来は遊漁者については規制の対象外ということでしたが、昨年から遊漁船に対しても漁獲制限を一部かけております。これは広域漁業調整委員会の委員会指示によりまして、漁業者が厳しいＴＡＣ管理をしている中で、遊漁者に対しても同様の規制が必要だという趣旨から、そういった規制を設けた例もございます。その他の魚種に関しては、当面ルールやマナーの啓発指導にとどまっておりますが、今後は資源の状況によってはそのような規制も必要になってくると考えますし、国の方でも、そういった面も含めて今後、数量管理に関して、遊漁者に対しても規制の検討を行っているところだと聞いております。以上でございます。

生田技監

その他、ご意見ご質問ございませんでしょうか。それでは坪江委員、ご発言どうぞ。

坪江委員

ありがとうございます。資料３－３のところになるかと思うのですが、私たちのところではこれまで浜の母さんなど料理教室や、交流会など楽しみにしていたところがあったのですが、コロナの関係でほとんどできなくなっています。

す。支える側のお母さん方の交流も重ねながら、お料理を教えてもらったり、海の状況を教えていただくというのは、私たちも体験をしているかのように学べ、美味しくいただくということがすごく楽しみなところもあったので、今なかなか難しいところなのですが、オンラインでいろいろなことができるようになってきたと思いますので、そういうようなことも少し考えていただけたら、私たちは組合員さんに呼びかけて、ぜひお知らせさせていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

古村水産局長

坪江委員ご意見ありがとうございます。確かに最近コロナの影響で、直接料理教室等を開催する機会が設けられないということは感じておまして、ご指摘のように、オンラインを使っての開催などは、かなり有効だと思いますし、世の中にそのような流れになってきているということもございますので、我々としても、開催方法も含めまして、前向きに検討させていただきたいというふうに思います。どうもありがとうございます。

生田技監

その他どなたかご意見ご質問等ございませんでしょうか。川崎委員ご発言どうぞ。

川崎委員

先ほどコープさっぽろの坪江委員からお話がありましたが、浜の母さんの料理教室について、女性漁業士会でもやっておりますが、本当に大事なことだと思います。今は魚離れが進んでいて、例えば私の地元の学校で開催しておりますが、漁業者の子供たちであっても、自分でなかなか捌くことはできませんし、秋サケの腹を切って筋子を見せたら感激の声を上げるんですよね。今は店で売られている魚は骨抜きで二切れくらいのパッケージに入ってます。すごく活用はしやすいのですが、やっぱり魚は一本のままの姿を見せて、その上で捌いて素材を味わうのが、子供に対しての大事な教育だと思います。やはり今は魚離れの影響か、市場での付加価値がそんなにないんですよね。えりもの場合は、魚の値段が低迷している。各家庭でそんなに食べなくなったのかなというのが、残念だなと思いつつも、何とか浜を潤すために皆さんの力を借りていきたいなと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

古村水産局長

川崎委員どうもありがとうございます。おっしゃるように、魚の食べ方から始まって、そういったことをお子さんに教えて伝えていくということが非常に大事だと思いますし、またコロナの影響で外食需要が減っているという中では、逆に家庭で魚を食べる機会が増えていると思います。道としてもそういった取組を皆さんと連携しながら、実施していきたいと思っておりますので、引き続きよろしくお願いいたします。

生田技監

他にどなたか。木村副会長ご発言をよろしくお願いいたします。

木村副会長

最後の5ページ目ですが、漁具の再資源利用化が書かれております。これは

非常に重要なことだと思います。もう一つ、水産だけではないのですが、もう少し踏み込んで、環境問題として、マイクロプラスチックの問題も、何かあってもいいのかなと思います。現在年間200万トンのプラスチックが海洋に流れ込んでいくというデータがあり、2030年には魚の資源よりプラスチックが多くなるという統計まで出ております。私も海に出て、魚を獲って腹を割いた時に大体魚の内臓の中から、マイクロプラスチックが出てきます。そのぐらい魚はプラスチックを食べている。さらにプラスチックが細分化していった中で、現在は体外に出ているであろうものが、さらに消費されて体内に入っていくだろうという研究もなされてきています。そういった中で、やっぱりプラスチックは最終的に海に流れていき、海の環境をどんどん悪くしている、マイクロプラスチックとなりそれが消費者に流れていくということ、水産からフィードバックしてもいいのではないかと思います。食を教えるのと同様に、海の環境を若い人に教えていく、そういったものも水産行政にあってもいいのではないかと思う。環境問題だと言ってしまおうと環境問題なのですが、やはり一番関わりのある水産から発していくのが重要ではないかと。若い人に海の環境を守るということを教えていく。そういった方策、施策があってもいいのではないかと私は思います。ちょっと関係ないかもしれませんが、一言ご意見させてください。

古村水産局長

副会長、貴重なご意見ありがとうございます。マイクロプラスチックの問題につきましては、国でもいろいろ対策を検討していると聞いておりますので、そういった情報も得ながら、水産サイドからもどのようなことを取り組めるのかということも含めて、検討させていただきたいと思っております。ありがとうございます。

生田技監

続きまして、盛田委員ご発言をお願いいたします。

盛田委員

ありがとうございます。今、副会長からもあった環境の話で、北海道でもゼロカーボンをやっていますので、今度の計画の中にはしっかり項目として、どこかに入れなきゃいけないのかなと思います。あと、全体的にいつも見られる目標が、生産量ばかりだと、野球でいくと20点取ればいいけど21点取られたら駄目みたいな、間違ったマネジメントをしてしまうのかなと。やはり漁労所得など質の方にチェンジするために、そのような目標設定を皆さんに示した方がいいのかなと思います。今後、各地域で審議されていくかと思っておりますし、地域でまたお話しさせてもらいますが、そういった考え方もあるのではないかなということで発言させていただきました。

古村水産局長

盛田委員どうも貴重なご意見ありがとうございます。目標設定のあり方というような話かと思っております。今後、こういった目標設定が必要なのかも含めまして、検討を進めさせていただきたいと思っております。また引き続きご助言よろしくをお願いいたします。

生田技監

では続きまして、山田委員ご発言をお願いいたします。

山田委員

ありがとうございます。ラルズの山田でございます。昨年末にですね、実は魚の売り上げを伸ばそうと、多くの方にコロナ禍で調理をしていただくということで、YouTube を利用し、刺身の切り方などをバイヤーさんに手伝ってもらいまして、店内の刺身コーナーで流してみました。YouTube でアップすると、大体どれぐらいの人が視聴されているかというのは見えるので、結構な勢いで視聴される方もいて、やはりそこのお刺身が非常に売れたなということが実際にありました。

また、健康志向が高まっている中で、どういうものが健康の食材であるか、冷凍品が今すごく需要が伸びておりますので、そういった新しい商品の開発に着手してもいいのかなと思います。

若い方が料理から離れており、企業としては学校などに食育の勉強会をやっていますが、それ以外のところで若い方はITを利用する方もすごく多いので、若年層の方からいろんな意見を聞き入れて、どういったもので勉強しているのかなども聞きながらやっていくとすごくいいものができ上がるのではないかと思います、発言させていただきました。よろしくをお願いいたします。

古村水産局長

山田委員、大変貴重なご意見ありがとうございます。今おっしゃられたYouTube など動画を配信するということに関しては、今の若い方々は非常に興味があると思いますし、非常に有効な手法だと考えておりますので、そういった手法も取り入れながら、また、お話の中でも冷凍品の話も出ておりましたが、冷凍技術もかなり進歩している面もございますので、そういったところも捉えながら消費拡大に向けて、取り組みを進めていきたいと思っております。引き続き、ご助言よろしくをお願いいたします。

生田技監

続きまして、どなたかご意見ご質問ございませんか。増毛町長堀委員ご発言をお願いいたします。

堀委員

ありがとうございます。3ページの高付加価値化の取り組みで、漁業者自らが加工、製品化する檜山海参（ヒヤマハイシェン）、これに非常に興味がございます。漁業者がただ獲ったものを市場に出すというだけでなく、これからは付加価値を高めて、そして漁業者の所得向上、このためにはそういったことも必要ではないかと思いました。

それとナマコなんですが、資料3-4にありますけれども、密漁が以前のアワビからナマコにシフトしているのではないかと思います。ですから、ナマコの密漁対策を強化していただきたい。

それからもう1点、6ページにライフスタイルの変化等に対応した魚食の普及という部分がございます。増毛町の水産加工会社で数の子を普及させるため